野菜２（葉菜類・その他）

だいこん（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
黒 腐 病	1.発病畑はアブラナ科野菜の連作を避け、低湿地での栽培も避ける。 2. 野菜類の黒腐病に登録がある薬剤で防除する。	1.病原細菌は傷口から侵入するので、キスジノミハムシ幼虫や、センチュウ、強風、暴風雨などにより傷を受けないようにする。
モザイク病	1.主にアブラムシ類によって伝染するので、発芽後からアブラムシ類を防除する。 2. 耐病性品種を利用する。	1.銀白色のポリフィルムをマルチすると有翅アブラムシの飛来が少なくなり、モザイク病防除の効果も認められる。
コオロギ	1.畑の周辺に雑草が多いと発生が多くなるので除草に努める。	1.発芽当初の幼苗の被害には特に注意する。

はくさい（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
モザイク病 えそモザイク病	1. 陸稲、トウモロコシ、サトイモなどの畦間には種する。 2. 秋まきの場合、は種期を遅らせる。 3. 発芽期から有翅アブラムシの防除に努める。 4. 抵抗性品種を利用する。	1. モザイク病、えそモザイク病はアブラムシ類が媒介する。 2. アブラムシ類は晴天の日が続くと発生が多くなるので注意する。

か ぶ（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
黒斑病	1.肥料切れすると発病が激しくなるので十分施肥する。	1.黒斑病は10月下旬ころから発生が多くなり、雨の多い時多発する。春にも発生しやすいので注意する。
モザイク病	1.主としてアブラムシ類によって伝染するので、発芽後からアブラムシ類の防除をする。	1.銀白色ポリフィルムのマルチ及びテープを使って有翅アブラムシを回避する。

キャベツ（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
モザイク病	1. 主としてアブラムシによって媒介されるので、発芽初期から有翅アブラムシの防除を徹底する。	1. モザイク病の病原は、カリフラワーモザイクウイルス（CaMV）、キュウリモザイクウイルス（CMV）、カブモザイクウイルス（TuMV）である。

カリフラワー（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
苗立枯病	1. 床土は次の方法で消毒する。 蒸気消毒80℃10～15分 2. 発病を認めたら病株はただちに抜き取る。	1. 土壌消毒の頁を参照。 2. 苗床は過湿にならないように管理する。

チンゲンサイ（野菜類・非結球あぶらな科葉菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
べと病 黒 斑 病	1. 肥料切れすると発病が激しくなるので肥培管理に注意する。	1. べと病は9月下旬頃から、黒斑病は春と10月下旬頃から発病が多くなり、降雨が続くと多発する。
黒斑細菌病 黒腐病	1. 発病ほ場ではアブラナ科作物の連作を避ける。	
えそモザイク病	1. アブラムシ類の防除を徹底する。	1. えそモザイク病の病原はカブモザイクウイルス（TuMV）である。

ほうれんそう（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
炭 疽 病	1. 密植を避け間引きし通風を図る。 2. 低湿地での栽培は避け、その他のほ場でも排水を良好にする。	1.窒素質肥料の過用を避けカリ肥料を増施する。
モザイク病 えそ萎縮病	1. 生育初期から有翅アブラムシに重点をおいて防除する。 2. 発病株は早期に抜き取る。	1.モザイク病、えそ萎縮病ともアブラムシ類によって伝染する。

レタス・非結球レタス（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
モザイク病	1. 生育初期から有翅アブラムシに重点をおいて駆除する。 2. 苗床は必ず施設開口部に防虫網を設置（2 物理的防除法(4)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）しアブラムシ類の飛来を防ぐ。	1.シルバーテープやシルバーポリマルチをすれば有翅アブラムシの飛来防止とモザイク病の防除に効果が認められる。
苗立枯病	1. は種や仮植に用いる用土は次の方法で消毒する。蒸気消毒80℃以上10～15分。 2. 苗床は過湿にならないように管理する。	

セルリー（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
モザイク病	1. 苗床は、必ず施設開口部に防虫網を設置（2 物理的防除法(4)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照）し、アブラムシ類の侵入を防ぐ。 2. 定植後も生育初期から中期まで寒冷紗で被覆する。 3. 発病株は見つけ次第抜き取り、土中に埋める。なお、周囲の雑草及び作物のモザイク株も抜き取る。 4. 生育初期から有翅アブラムシに重点をおいて防除する。	1. 病原のキュウリモザイクウイルス（CMV）、セルリーモザイクウイルス（CeMV）は、アブラムシ類によって媒介されるので、アブラムシ類の防除を徹底する。

パセリ（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
炭 疽 病	1. 発芽直後から7月中旬頃までの雨の多い時期に雨除けをする。	1. 初夏播き栽培で発病が多い。 2. 梅雨期などの多雨の条件で多発する。

たまねぎ （野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
萎 縮 病	1. 生育初期からアブラムシ類の防除を行う。	1. 病原のシャロット黄色条斑ウイルス（SYSV）はアブラムシ類によって媒介されるので、アブラムシ類の防除を徹底する。 2. ネギ畑、特に採種ほ近くに苗床を設けない。
えそ条斑病	1. 無病苗を確保するため、防虫ネットを張った施設内での育苗、薬剤防除等の対策を実施する。 2. 罹病した植物体はほ場外に持ち出してビニール袋等で密封処分するか、土中深くに埋め込む。 3. ネギアザミウマの薬剤防除を実施する。	1. 病原のアイリス黄斑ウイルス（IYSV）はネギアザミウマによって媒介される。特に、初夏および秋にはネギアザミウマが増加するため、注意を要する。 2. ネギアザミウマは薬剤抵抗性が発達しやすいので同一薬剤の連用は避ける。 3. 春から初夏は雑草にネギアザミウマが生息するので、ほ場周辺の除草を徹底する。

ねぎ（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
萎 縮 病	1. ネギ類の畑近くに苗床を設けない。 2. 早まきを避ける。 3. 生育初期からアブラムシ類の防除を行う。	1. 病原のシャロット黄色条斑ウイルス(SYSV)はアブラムシ類によって媒介されるので、アブラムシ類の防除を徹底する。 2. 4～5月に有翅アブラムシの飛来が多い。 3. 早植の場合は定植後も薬剤散布を行う必要がある。
えそ条斑病	1. 無病苗を確保するため、防虫ネットを張った施設内での育苗、薬剤防除等の対策を実施する。 2. 罹病した植物体はほ場外に持ち出してビニール袋等で密封処分するか、土中深くに埋め込む。 3. ネギアザミウマの薬剤防除を実施する。	1. 病原のアイリス黄斑ウイルス(IYSV)はネギアザミウマによって媒介される。特に、初夏および秋にはネギアザミウマが増加するため、注意を要する。 2. ネギアザミウマは薬剤抵抗性が発達しやすいので同一薬剤の連用は避ける。 3. 春から初夏は雑草にネギアザミウマが生息するので、ほ場周辺の除草を徹底する。

らっきょう(野菜類)

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
黒点葉枯病	1. 被害株はほ場に残さないよう処分する。	
ウイルス病(黄色条斑病、萎縮病など) えそ条斑病	1. 種球はウイルスフリー株を導入し、網室で増殖する。 2. アブラムシ類、アザミウマ類の防除を実施する。 3. 発病株はほ場に残さないように処分する。	1. 黄色条斑病、萎縮病などの病原ウイルスは、種球伝染またはアブラムシ類(有翅虫)が媒介する。 2. えそ条斑病(病原はIYSV)は、ネギアザミウマが媒介する(防除上の注意事項はねぎの項に準ずる)。
タネバエ	1.被害株からの匂いが成虫の産卵を誘引するため被害株はほ場に残さないように処分する。	1.有機質肥料や未熟堆肥を施すと多発する。

ごぼう(野菜類)

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
角 斑 病	1. 発病の多いほ場では連作を避ける。 2. 発病葉は収穫時に集めて土中深く埋める。	1.秋期、比較的古い葉、又は生育不良株に発生しやすい。
モザイク病(ｺﾞﾎﾞｳﾓｻﾞｲｸｳｲﾙｽ、CMV、ｺﾞﾎﾞｳ斑紋ｳｲﾙｽ)	1. アブラムシ類を防除する。	1. ゴボウモザイクウイルス、キュウリモザイクウイルスはアブラムシ類が媒介するが、ゴボウ斑紋ウイルスは伝染法が不明である。

に ら(野菜類)

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
萎 縮 病	1. 4月下旬～6月上旬、8～9月の有翅アブラムシの飛来時期に防虫網を設置する(2 物理的防除法(4)防虫網を用いた害虫飛来防止法を参照)。 2. アブラムシ類を防除する。	1. 本病は、アブラムシ類(有翅虫)が媒介する。

れんこん（野菜類）

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
腐 敗 病	1. 冬期もハス田の水を切らないようにかん水する。 2. 発病ほ場では早掘り、べた掘り等を実施する。 3. 種ハスは無病地から取る。 4. 発病田では連作を避ける。また激発田からかんがい水が流れ込むようなところでは植付を避ける。 5. 発生地は窒素肥料の多用を避ける。 6. 収穫後ハス田の清掃をよく行い、茎葉やレンコンの残りをハス田の外に出す。	1. 落水すると発病が多くなる。

わ さ び

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
実生苗立枯性病害	1. 苗床は過湿にならないように注意する。	
墨 入 病 輪 腐 病	1. 苗は無病株から株分けする。特に割口の黒変していないものを選ぶ。 2. 根茎を傷つけないように注意する。 3. 被害の著しいところでは収穫を早める。 4. 収穫後の作土洗いは入念に行い、粘土分や植物残渣を取り除く。	1. 墨入病はホーマ菌（糸状菌）、輪腐病はコリネバクテリウム菌（細菌）による。 2. 栄養繁殖を続けると発生が増加するので、実生後代の利用は3回を限度とする。
軟 腐 病	1. 苗は無病株の健全株から株分けし、割口の変色していないものを選ぶ。 2. 発病地では秋から早春に植付け、収穫はなるべく高温期前にする。あるいは、実生の1年栽培を行う。 3. 日あたりの強いところではハンノキを植えるか、遮光資材をかける。 4. 常に冷水（13℃～15℃）がかかるようにし、また落葉などの有機物や泥が根の周辺にたまらないよう水管理に注意する。 5. 根を傷つけないように注意し、葉を食害する虫（アオムシなど）は定植前に防除する。 6. 河川水を用いるほ場では、沈砂槽を設置し、汚濁水が流入しないようにする。 7. 作土の粒子が細かい地帯では排水不良によって発病が促進される可能性があるので、パイプ栽培を行う。	1. 本病の発生は気温30℃以上水温18℃以上で多くなる。一般に2回越夏した場合に被害が顕著になる傾向がある。 2. 罹病株から水流に沿って下方へ伝染し、被害が広がることが多いので、ほ場衛生に注意する。 3. わさび田に生息する水生動物（カワゲラなど）は、根茎を食害して本病の発生を助長するため注意する。
萎 縮 病 (ﾀﾊﾞｺﾓｻﾞｲｸｳｲﾙｽ、ｷｭｳﾘﾓｻﾞｲｸｳｲﾙｽ、ｶﾌﾞﾓｻﾞｲｸｳｲﾙｽ)	1. 実生苗の防除 (1)種子は倉出しして砂と分離するときよく水洗いする。 (2)苗床に病株の茎葉や根をもちこまない。 (3)アブラムシ類を防除する。 (4)発病株は抜き取る。 2. 本ぽの防除 (1)苗は健全な実生苗又は健全株から株分けしたものを用いる。 (2)発病株は抜き取る。	1. 病原はタバコモザイクウイルス(TMV)、キュウリモザイクウイルス(CMV)、カブモザイクウイルス(TuMV)による。 2. TMVは種子伝染、種茎による伝染ならびに汁液伝染を行うので、実生苗の防除の項(1)(2)(4) 及び本ぽの防除の項(1)(2)を実施する。 3. CMVとTuMVは、主として種茎による伝染、汁液伝染ならびにアブラムシ伝染を行うので実生苗の防除の項(3)(4)及び本ぽの防除の項(1)(2)を実施する。